

旭川流域連絡協議会 拡大幹事会 議事録

日 時：平成15年10月17日（金）14：00～16：00

場 所：建部町 建部町文化センター 小ホール

参加者：岡山市、瀬戸町、吉井町、御津町、建部町、加茂川町、久米南町、中央町、旭町、
落合町、北房町、久世町、勝山町、湯原町、富村、美甘村、岡山県土木部河川課、
岡山県土木部河川開発課、建部建設事務所、真庭地方振興局、岡山河川事務所

打合せ事項

配付資料の議事次第に基づき、以下の事項について打ち合わせを行った。

(1) 「旭川流域の水防災に関する研究会」実施要領（案）について
事務局より実施要領（案）を説明、了承。

(2) 水防及び保健衛生に関するアンケートに対する意見交換について
提出された調査表に基づき、各市町村より台風10号時の対応等について発表。
また、各市町村の発表について、質疑応答及び意見交換を行った。
(調査表に関する補足事項、質疑応答及び意見交換は、別紙の通り。)

その他

・事務局より「旭川流域の水防災に関する研究会」への積極的な参加をお願いした。また、パネラーとして出席していただく自治体へ発言要旨の記入について依頼した。また、研究会主旨を以下のように説明。

「災害時には、コミュニティ（地区）単位での対応が被害軽減に大きな役割を果たす。各々のコミュニティが自主的にどうやったらうまくいくか考えて行動していくことが重要である。町村内で被災程度がまったく異なる中で、不足しているものの補充を含め、行政としていかにしてそのような流れを作れるか。そのような視点から活発な意見交換のできる研究会としたい。」

調査表に関する補足事項、質疑応答及び意見交換

岡山市

- ・情報の収集が難しく、連絡体制がスムーズでなかった。
- ・例のない洪水だったため、樋門及び排水機場の操作にトラブルが多く生じた。
- ・樋門及び排水機場の操作をスムーズに行うためにも、情報の早期入手、情報がつながっているかの確認が必要。

瀬戸町

- ・道路、河川とも県・町など管轄があるが、連絡を密にして対応したい。
- ・河川氾濫・道路への倒木、落石等の情報の早期収集が必要。
- ・降雨が少なくなり、水位も低下したため水防体制を縮小したが、その後予測外に吉井川が増水し、再招集をかけた。しかし、その時には道路交通整理のほうに人員がさかれ、災害復旧に手がまわらなかった。

Q：いったん水防体制を縮小したことについて、吉井川の水位情報はどのような形ではいていたのか？

A：吉井川上流の河田原、津瀬、津山の水位についてもフリックスで確認していたが、ここまでの急激な増水は予測できなかった。

吉井町

- ・町内及び漂流物を含め、ゴミが 4,100 t 発生し、多大な費用を要した。処分については、町内の土木業者、処分業者に協力をもらった。
- ・防疫対策として、被災家屋の消毒を行い、伝染病予防を保健所職員と共に説明に回った。
- ・独居老人等の安否確認。
- ・災害の 1 ヶ月後、健康相談を実施。
- ・消毒薬の不足
- ・生活弱者への支援を町がどこまで行うのかが問題。

Q：生活弱者については、行政、地域住民のどちらが主導しておこなったのか。

A：担当が欠席のため、後日回答する。

御津町

- ・土のう袋はあるが土がなく町内の採石場から調達した。ウォーター土のうが有効と考えられるが、単価が高いため採用できない。

- ・住民及び災害現場への連絡が困難だった。
- ・小さい頃から意識を高める学校の授業に災害学習を取り込んではどうか。

Q：現在も学校教育に災害学習を取り入れているのか。

A：現在は行っていない。過去に消防団が小学校へ訪問し授業を行った際には、子どもの反応がよかった。

Q：対策本部設置が遅れたのは？水位情報がよくなかったのか。

A：上流の水位まで把握できなかった。当時水防の経験がなく、情報をどこから入手すればよいか分からない状態であった。

建部町

- ・西原地区では旭川から逆流し床上・床下浸水が発生。
- ・ダム放流後にその情報を各区長へ一斉FAX、西原地区を中心にして7地区で自主避難、避難所に毛布を配布。
- ・翌日より防疫の広報：各区長へ一斉FAXを流し、各地区で至急回覧を依頼。
(井戸水の飲用をしないように。井戸水の消毒方法。床上・床下の消毒方法)
- ・井戸については、県の援助により無料で検査を行った。
- ・主に一人暮らしの家(約200戸)に緊急通報のシステムがあったが、それを使っての要請はなし。役場より電話で全戸に安否確認を行った。
- ・断水のため、入浴ができなかったため、建部の温泉で利用料金を半額とした。
- ・高齢者世帯の近所の援助
- ・住民のボランティアの保健涵養
- ・多量のゴミ処理
- ・品川橋の崩壊により添架水道管が破損。建部町の約80%(1863戸)が断水。自衛隊や他の市町村から支援をもらった。水道管の仮復旧に苦労した。

Q：各区長宅にFAX一斉送信のシステムがある市町村は他にあるか

A：瀬戸町、加茂川町、中央町

Q：緊急通信のシステムがある市町村は他にあるか

A：旭町、加茂川町、美甘町

Q：ボランティアの受け入れについて問題はなかったか。

A：主に給水を行ってもらった。住民が言いたい放題いうのを我慢してよく協力していただいた。ボランティアの育成が重要。

建部町には29地区あるが、区長を中心に隣近所で助け合いを行った。各地区が自立しており、足りない部分を行政へ要請。

加茂川町

- ・小河川が氾濫し、床下浸水等の被災が点在したため、被害戸数の把握に時間を要した。
- ・崩壊による道路通行止めで車の誘導に手間取った。情報の一元化が必要。

久米南町

- ・早い段階で災害対策本部を行い、防災行政無線の使用により住民の避難がスムーズだった。
- ・久米南町は棚田が多い地域で、小河川の土砂の堆積が問題となっている。また、河川内の立木伐採等についても、県と相談ながら進めていきたい。
- ・情報の収集、集約が困難であった。

Q：情報の収集、集約については、どのような情報か。

A：住民からの被災情報の収集が困難だった。被災情報をまとめた後に、出てくるものもあった。

Q：土砂の堆積、立木は災害時にでてきたものか？

A：日常的にある。部落単位では対応が不可能なので、危険度の高いところから撤去していく。

中央町

- ・調査表に沿って説明。

旭町

- ・対策本部設置をしたものの、道路寸断により集合が出来なかったため、無線放送を行い、各地区消防団に自主的に被災箇所の把握及び応急措置を自主的に行うよう指示。
- ・消毒液の調達について、備蓄がなく薬剤店が1軒のため、診療所に急遽借用した。
女性職員：薬剤配布準備（容器への小分け作業、使用説明書添付等）
男性職員：石灰散布（各戸で散布できるところは配布）
を、その日のうちに配布した。
- ・社会福祉協議会においては、地域の巡回や運営しているデイサービスセンターの浴場を夜間開放するなどの支援を行った。
- ・各戸の巡回には、声をかけて回ってもらえるだけでうれしかったとの地域の声あり。災害後の心のケアも必要である。

Q：薬剤の備蓄は現在もあるか？

A：災害時の備蓄はない。現在予防接種の薬液で余分に購入したものを使用する形である。また、診療所に緊急時の依頼をしておくことも考えたい。

Q：クレゾールが臭いと言うことだが、他自治体で何か他の消毒剤を使用している所は？

A：建部町の保健所では、床下には石灰、床上には、オスバンとクレゾールを薦めていた。役所としては、オスバンを散布した。建部町でも常備しておらず、薬局から借りた。

落合町

- ・床下浸水等した場合のマニュアルを町独自で作成する必要がある。
- ・局地的な集中豪雨が増加しており、災害の発生も昔とは異なってきた。一つの町の中でも雨の降り方が違うので、より細かな雨量情報がほしい。山の手入れ不足から水の流出が早くなってきている。広報誌等で災害の危険性について周知を行いたい。また、マニュアルの改善も必要。
- ・土のうについては、H13に備蓄分で古くなって使えなくなったものをすべて買い換えた。また、消防団の器機庫横に借地等して貯蔵スペースをつくり真砂土を一定量配布した。
- ・町村は技術的に弱いため、大災害時には専門技術者の派遣をお願いしたい。H10時には、農林関係で真庭地方振興局より半月ほど常駐で派遣をしていただいた。また、洪水に限らず、震災時にも発生する家屋の損傷について、専門技術者の派遣をお願いしたい。

Q：農林関係の専門技術者の派遣について、実際にはどのような作業を行ったのか。

A：測量、設計、査定等に携わってもらった。

建部建設事務所より情報提供

現在県下に200～300人程度の建築査定のボランティアがいる。岡山県の建築指導課に支援要請してください。鳥取西部地震の際には、新見市へ県職員で一級建築士を数名派遣している。

北房町

- ・調査表に沿って説明。

Q：マニュアルの改善について具体的には進行しているか。

A：具体的にはまだだが、ハザードマップの作成に合わせて改善していきたい。

久世町

- ・町内各地で被害状況がまったく異なった。
- ・各地区からの災害情報の収集及び把握ができなかった。訓練が必要である。
- ・H10時、道路が寸断されたために水防資材を取りにいけず、土のうに使う真砂土が不足したため、現在は器庫の近くに真砂土備蓄をしている。

勝山町

- ・調査表に沿って説明。

Q：「広域的な支援」について具体的に想定しているのは？

A：代理のため、不明。

Q：寄せられた情報に対応できない部分とは？

A：量が多くてさばききれないことや、施設等の管轄（管理主体）が把握できていなかった。

湯原町

- ・深夜で対応に混乱があったが、過去（S56）に災害を経験していたため、対応がスムーズにいった面もある。

富村

- ・橋が流出するなど、道路が寸断され、消防団員が待機するほかなかった。
- ・富村の西谷地区では、携帯が圏外のため連絡がとれなかった。移動無線の必要性を感じているが、未整備。町内で携帯電話がすべてつながるようにしたい。
- ・独居老人宅について、翌日より手分けして状況の把握を行った。
- ・薬剤の備蓄不足もあった。

美甘村

- ・夜間出水だったため避難を優先させた。二次災害防止のため、待機して様子を見るのか、作業を行うのかの判断に時間がかかった。
- ・市町村の取り組むべき事項として、ケアの援助や独居老人、一人暮らしの安否確認手段を整える必要がある。
- ・村民の取り組むべき事項としては、避難場所や防災意識の啓発が必要。

全体をとおして

Q：学校教育に災害学習を取り入れている自治体は？

A：特になし